

説教 『父ヨセフとインマヌエル』 山本 護 牧師
聖書 イザヤ書 7:13~15/マタイによる福音書 1:18~25

キリストの御降誕から遡ること六百年前、イザヤは預言した。「それゆえ、わたしの主が御自ら、あなたたちにするしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ(イザ 7:14)」。男児は「凝乳と蜂蜜を食べ物とする(7:15)」。この救済者イメージは「大食漢で大酒飲み(マタイ 11:19)」のイエスというより、まるで洗礼者ヨハネではないか(3:4)。救済者が享楽であろうと禁欲であろうと、それは表面的なこと。光が当たっている焦点は「インマヌエル=神は我々と共におられる(1:23)」ことだ。その意味でイエスの誕生は「主御自らが与えた徴」、預言の成就であった。

「[見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる]。この名は、[神は我々と共におられる]という意味である(1:23)」この出来事を観想し、観想を軸に据えて周囲を眺めてみよう。ルカ福音書では降誕にあたって、「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます(ルカ 1:47)」と神を大きくし(あがめ)、自己を小さくするマリアであった。マタイ福音書の場合、天使は婚約者ヨセフに告知する(マタイ 1:20~23)。だがヨセフもマリアも言葉を発せず、完全に沈黙している。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎えいなさい(1:20)」と天使は告げ、その命令を黙々と果たした。彼らはいっそう「神を大きくし、自己を小さくしている」のかもしれない。

「インマヌエル=神は我々と共におられる」。どうか間違えないでほしい。「我々が神と」共にいるのではない。「神が我々と」だ。すなわち敬虔な私として神へ近づくのではない。地上で、罪ある私のままで、神が共にいて下さるのだ。聖らかな天上にあらうとせず、地上に降ったキリストにおいて、私の罪を御自分のこととされる神。それでは、そのことで世にある人間の何が変わるのか。

ヨセフはマリアと同じく(ルカ 1:30)、「恐れるな」という天使の言葉を聞いた(マタイ 1:20)。彼は「正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した(1:19)」自尊心を傷つけられた恨みを堪え、しかも清く正しくあるためには「ひそかに縁を切る」しかない。しかし夢で見ただけの天使の、「恐れるな」という言葉に、「正しくない道」を進む決意を固めた。マリアの場合もそうだ。聖霊によって身ごもった私生児を産むことは、彼女にとって地獄。だが「恐れるな(ルカ 1:30)」という言葉に支えられ、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように(1:38)」と、「針の筵」を踏んで行く覚悟をした。彼らはまさに、「インマヌエル=神が我々と共におられる」ことを最優先に選んだ人間であった。二人の姿を思い描いていると胸が熱くなる。

神は、マリアをイエスの母とした。つまり「インマヌエル」の母となりうる、純朴な田舎の少女マリアを選んだ。だがマリアだけではまだ半分だ。実直で心優しく、無口で男らしいヨセフを養父として選び、彼は「インマヌエル」の父としてイエスを守り、育てた。ヨセフはイエスの誕生後、家族でしばらく辛い旅をし、そして消息は途絶える。しかし、罪を内包する人間の正しさや原則を超えて、「インマヌエル」の真実に従った最初の人となった。たとえ短かくても、なんという輝きであろうか。



【おまけのひとつ】

月の光が ヨセフとマリア 二人の影を地に落としている 彼らはどこへ行くのか 「恐れるな」の言葉を道標とする旅 キリストの影は近づき 二人の姿は 遠景で いっそう小さくなっていく